原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第百三十三号

原告団レポート

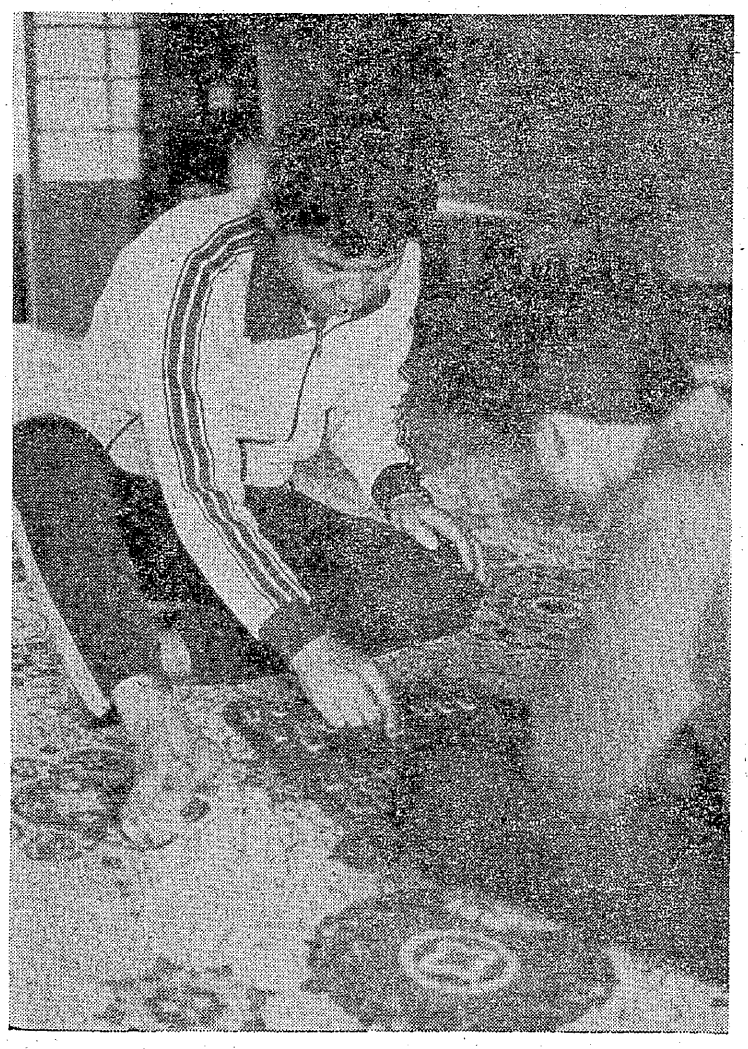
CO患者――鳥谷　進さん

真昼の"青春"を返せ

「できることなら社長を殺してやりたい」、とたぎる怒り

恋人と結ばれぬまま終る

元気なころ、うたごえ仲間といつしよに。いまは共に、CO患者になつてしまつた人の顔も見られる。



外泊が許され、わが家へ帰つてきた鳥谷さん。さつそく、甥の光晴君を相手に将棋差し。最後まで何ごともなく、この手合せが終ればいいのだが。何しろ、CO中毒症が体の内面で感情の爆発を待ちかまえていることだから。

変な問答

「生まれたのは、いつ？」

聞くのに、彼は答える――「わからんもん」。かわって母親が教えてくれた。

「この人の生まれは、昭和十二年の一月二十二日ですよ」

「すると、今いくつになるのかな？」

「わからん。三十八歳ぐらいじゃないかな」

「なんの、もう四十一歳になるたい」――母親はたしなめておいて、そして続ける、「まるで子どもですもんね。こげんか人間になってしまいました」。

×

鳥谷進さんは、一級という障害等級にもとづいて労災補償を受けているCO患者だ。母親の言にあるように今四十一歳。大牟田労災病院（大牟田市吉野）に入院している。

あの、昭和三十八年十一月九日の三池大爆発（三川鉱炭じん大爆発）に被災して以来長く、久留米大学付属病院（久留米市旭町六十七番地）に入院中だったが、今年の十月はじめここへ転院してきた。病気が病気だけに、労災病院での、入院生活になじむまでにはかなりの波乱なしにすむはずはなかったが。

自宅は、大牟田市新港町六番地三川鉱社宅三棟。父親の薫明さんはすでに世を去り、六十四歳という母親の小良さんと、荒尾アソニットに車で通勤している妹の君子さんと、それに中学一年生だという甥の光晴君が住んでいる。

彼は、週に一度外泊が許され、わが家に帰ってくる。土曜の日に家に帰り、日曜日をわが家で過ごしたあと、月曜の日に再び病院へ帰っていく。会社が、車での送り迎えはしてくれる。

ついこのころ同家をたずねると運よく彼がわが家に帰ってきたところだった。この文のはじめの問答は、実はそのときのもので、CO患者とはいえそのおぼつかなさはおびただしかった。

残酷な彼災

鳥谷さんが、三井天領病院に意識不明のまま担ぎこまれていることがわかり、母親の小良さんが駆けつけたのは、その夜なかの午前三時近い頃だったという。

見れば、右肩にかなりのケガをしていたから、病院側はその方の手当にばかり気をとられ、CO中毒症に対する処置など眼中になかった。さいわい意識こそ回復し得たものの、今から思えばそのときはもう、CO中毒症にとりつかれてしまっていたことは歴然としていたのである。

飯を今食べさせてやったばかりだというのに、付添いの小良さんがやっとの思いで飯を食べ始めると、彼はフトンのなかから手を伸ばしたかと思うと、いきなり小良さんが手にする茶わんのなかの飯をわしづかみにしては、口に押しこんだ。そして、余りのことに驚く母親に向かって、大声をあげるのだった。

「俺には食べさせんで、自分ばかり食べるとは何ごとだ」

便所がわからなくなっていた。不意に走り出していく。どこへ放出されるかわからないので、あわ食って追っかけ、便所へつれもどす。ようすがおかしいと思いのぞいて見ると、なんと彼は「女用」の便器のうえにつっ立っていたり……。

そんなときの彼の両の目は、完全にすわっていた。「もう、普段の息子ではありませんでした」、とは母親小良さんの述懐で、彼はその月の十八日に早くも天領病院から久留米大学付属病院に移されていったのである。

こうして、鳥谷進さんのCO患者としての残酷な生きざまがスタート。青春も真昼の、二十六歳のときのことである。

相手は子供

久留米大学付属病院での十四年間にわたる闘病生活のあと、今は前述したように大牟田労災病院で闘病を続けている鳥谷さん。

その間確かにいくらかの点で回復を示してこそおれ、その度合いはこの文のはじめに紹介した問答によく示されている。

母親小良さんはいう――

「さいわい、この人が家に帰らすと、中学二年生の光晴という相手がいてくれるので助かるのです。四十一という年齢のおっちゃんに、まだ十四歳にしかならぬ子どもがよい相手だと思いますとなさけなくなりますけど、いっしょにテレビを見たり、将棋を差して遊んだり。ときには光晴が、息子に字を教えたりすることもあります。けれど、何といっても、息子の方がとしうえです。だから、相手に負けられんわけですよ。たとえば将棋を差していて、どうも自分の方が分が悪くなってくると、おっちゃんがこすいことをやるとですたい。そこで『おっちゃんが、こすいことした』、というのでケンカが始まるとですよ。ときには、なぐりつけたり……」。

「なぐる方はどっち？」、と彼の方を見ると、しきりに頭をかきながらニヤリニヤリ。

「すぐカッカするところが、この病気で、いったんいい出したが最後、我意を通さないと承知できないのです。反面、ものごとはすぐ忘れてしまいなさる。こんな息子にも、考えますと、被災前にはほれてくださる娘さんが決して少くなかったのでしたが」。

組合活動も

彼は、会社を退職する父親の薫明さんと入れかわり、三池炭鉱に入社した。父親の跡を継ぐように、はじめ港務所の仕事だった。昭和三十一年一月二十八日のことだった。その後三池闘争直後の三十六年、常一番の坑内機械工として三川鉱に移り、以後はもっぱら切羽重工でがんばった。

さて、三池闘争のころは――？

二十三歳だったが、彼は行動隊の支隊長の一人として闘いの先頭に立ち、三池労組情宣班の活動家として、マイクを手にしたこともあった。

激流の勢いで、その波動を広げていたうたごえ運動の活動家一人でもあって、自分が住む新港地域の青年たちと手をにぎり、自ら〝サボテン・コーラス〟を組織。三池闘争が終った昭和三十五年の十二月には、東京で開催された〝日本のうたごえ大会〟に参加しては、三池炭鉱労働者の闘いと誇りをうたいあげたこともある。

恋人いずこ

かってのうたごえ仲間の一人だった猿渡章博さん（港務所に勤務）は、彼について述懐する。

「とにかく性格の明るい人柄だったことを、今も覚えています」

だから当然なこと、鳥谷さんに心を寄せる娘たちは決して少くなかった。彼はいつとは知れず、そんな娘のなかの一人と深く心を許し合う仲となり、結婚の話もとどこおりなくすすみ、三十八年の十二月にはいよいよ彼女の両親のもとへ〝きめ櫛〟も届けるばかりにことは運ばれていた。その直前の十一月九日午後三時十五分、三川鉱で起きたうらみの炭じん大爆発が、輝く希望に満ちていた彼の青春をひと飲みにしてしまったのである。

「その娘さんは、この人が被災してまだ天領病院で苦しんでいるころさっそくかけつけてきてくれました。でも先生に相談するまでもなく、せっかくでしたけど会わせずにひきとってもらいました。爆発以来目がすわってしまい、別人のように変ってしまったわが息子を、どうしてその恋人などに会わせることができるものですか。そのときのつらかったことは、私にしても忘れることはできませんが、それからというものは、私は息子にいい聞かせてまいりました『進。あきらめようね。結婚するということは、遊びではなくって、ちゃんと男としての責任を果たさなければならないのだから。あんたには無理なことばいね』、と。また、体も心もすっかり子どもに逆もどりしてしまった息子では、結婚できるはずもないことですから」

そう語りながら、母親の小良さんはそっと目を押さえるのだった。

青春を返せ

あの大爆発という資本の暴力によって、残酷に奪われていった青春がここに一つ。

「この間、病院でサツマイモ掘りをやったとき、見ているばかりでは面倒くさかったから『イモはこぎゃんして掘らんなんとたい』と、教えるつもりでかわったのはよかったが、掘ったイモば見てみると、ズラーッと打ち切ってしもうとったもん。だから、俺にはなーんもさせてくれらっさん。考ゆると頭んカッカしてきて、だれでんかれでん、打っ散らかしてやろごつなってくるとたい。

ほんなこつ、俺は思うたこつもある。そのため、みんなのCO中毒がなおりでもするのなら、俺たちをこんなひどいめにあわせたあの栗木社長ば、打ち殺してやるのだが、と」。

CO患者＝鳥谷進さんのこのたぎる怒りを、どこへ向けるべきか。非情にも、それを奪った三井独占資本は、ちょうど真昼にさしかかっていた彼の青春を返せ。

☆　☆